本間久雄のワイルド研究
――大正時代――

佐々木　隆

2006年10月
日欧比較文化研究　第6号
日欧比較文化研究会

本間久雄のワイルド研究——大正時代——

佐々木　隆

プロローグ

本間久雄(1886-1981)は明治・大正・昭和の三代に渡って生き、日本のワイルド研究を支えてきたひとりである。本間の明治時代におけるワイルド研究の業績については、拙著「本間久雄のワイルド研究——明治時代」で詳しく述べた。[1] 本稿では本間のワイルド研究の関心が明治から大正時代にどう変化して来たのかを本間が出版した研究書を中心に探っていきたい。

1　本間久雄『高台より』

大正2年(1913)2月に春陽堂より出版された『高台より』(現代文芸叢書第21編)には「オスカア・ワイルド論」、「正宗白鳥論」、「鈴木三重吉」、「文壇時評数編」が収録されているが、「オスカア・ワイルド論」は明治44年(1911)3月に『早稲田文学』(第64号)誌上に発表されたものである。詳細は拙著「本間久雄のワイルド研究——明治時代」[2] をご覧戴きたいが、*The Decay of Lying* からさらに *De Profundis* へのワイルドの人生観上の変遷と共にワイルドの芸術観を明らかにしたことが大きな特徴であった。

2　本間久雄『近代文学之研究』

大正6年(1917)6月に北文館より出版された『近代文学之研究』には、「ワイルド傳中の一つの謎」(初出。1915年12月)、「獄中のワイルド」(初出。1915年9月、10月)、「ワイルドとダヌンチオ」(初出。1913年10月)、「谷崎潤一郎論」(初出。1913年2月)が収められているが、いずれも大正期に発表されたものを収録したものである。収録された論文のタイトルからもわかるが、本間の関心が獄中生活に向けられていることが伺える。

3　本間久雄『近代名著評釈』

大正7年(1918)5月に春陽堂より出版された『近代名著評釈』(文芸研究叢書第4編)には「第1章　文学鑑賞の順序」「第2章　近代文学と世紀末的傾向」「第3章　ツルゲーネフ」「第4章　ドストエフスキー」「第5章　トルストイ」「第6章　フロオベエル」「第7章
モウパツサン」「第8章　イブセン」「第9章オスカア・ワイルド」「第10章　メエテルリンク」が収録されている。

「第9章　オスカア・ワイルド」には「1　唯美主義の特色」「2　ドリアン・グレーの享楽生活」「3　『ドリアン・グレー』の道徳問題」「4　『ドリアン・グレー』の味ひ」の下位項目が設けられている。ここでは「1　唯美主義の特色」に注目しておきたい。本間はワイルドの唯美主義の要点を3つ挙げている。

第一は藝術はよろしく人生から遊離し、これを超脱すべきもので、これに囚へられてゐる間は完全な藝術ではないといふのであつて『何事でも、およそ現實的な出来事は藝術に累する。すべて藝術の悪しきものは實感から生まれたものである。自然的といふことであり、明白といふことは藝術的なものではない』と彼れ自ら云つた言葉に『すべて悪藝術と自然と人生とにかへりゆくところから生れる』とか『活動はその行ふ瞬間にすでに滅びる。それは卑しい事實である。この世は歌ふ人によつて、夢みる人のために造られたものである』などといふのがあるが、これらに依つてもワイルドの唯美主義がいかに現實を離れようとしたものであるかを知ることが出来る。

第二は、『藝術は、それ自らの外何ものをも表はさない。藝術には獨立の生命がある。そしてその開展するやたゞに藝

術自らの途に於てする』といふこと、言葉を換ていふと、藝術の目的又は美の目的は藝術そのもの、乃至美そのものであるといふのである。所謂『藝術は藝術のためなり』(All for Art's Sake)といふ主張の根本である。

第三に、自然及び人生は藝術を模倣するといふのである。古来の藝術論としては藝術論としては藝術は人生及び自然を模倣するといふのが當り前であるがワイルドはそれを逆にして自然及び人生が却つて藝術を模倣すると云ふのである。(3)

本間のワイルド観の原点は明治44年(1911)3月に発表した「オスカア・ワイルド論」(『早稲田文学』第64号)であるが、さらにこれを深めたものが発表されたのである。

4 『唯美主義者オスカア・ワイルド』

大正12年(1923)10月の本間久雄『唯美主義者 オスカア・ワイルド』(春秋社)は、掲載順に紹介すると、「ワイルド傳中の一つの謎」、「獄中のワイルド」、「ワイルドの快楽主義」、「ワイルドの生涯」と、これまで発表したものを改題等を施してまとめたものである。本間久雄は「人生も自然も芸術の模倣也」(『文章世界』第5巻第4号, 1909年3月)以来、ワイルドに関する論文を次々と発表して来た。本間は *The Decay of Lying* をまず紹介したが、*De Profundis* や *The Picture of Dorian Gray* の翻訳を経て、本間の関心はワイルドの獄中生活と獄中後に向けられた。必然的に作品としては *De Profundis* に関心が向けられ、いち早く翻訳にも取り組んだのである。しかし、本間の関心はこれまで発表された「ワイルド傳」で示されたワイルド像の相違に向けられたのである。本間は単にワイルドの紹介にとどまらず、同時期に出版されたワイルド伝の比較から「ワイルド傳中の一つの謎」の中では、アーサー・ランサム(Arthur Ransame, 1884-1967)の *Oscar*

Wilde: A Critical Study (1912) とアルフレッド・ダグラス (Alfred Douglas, 1870-1945) の *Oscar Wilde and Myself* (1914) のワイルド像の相違を「ワイルド傳中の謎」としたのである。本間はワイルドの遺稿管理人であるロバート・ロスにより昭和 35 年 (1960) まで大英博物館に保管されることになっていた *De Profundis* の未公表部分が公開されれば、この謎は解明できるものと推論したのである。

6　本間のワイルド研究の変遷

本間は明治以来、ワイルドを多く論じてきた。『早稲田文学』への発表はもとより、単行本としても大正 2 年 (1913) 2 月の『高台より』(春陽堂) には明治 44 年 (1911) 3 月に発表した「オスカア・ワイルド論」を収録、大正 6 年 (1917) 6 月の『近代文学之研究』(北文館) ではワイルドに関する論文が多く収録され、大正 7 年 (1918) 5 月には『近代名著評釈』(春陽堂) を出版、大正 9 年 (1920) 3 月には矢口達編『ワイルド全集』(第 1 巻、天佑社) の冒頭論文が本間久雄「オスカア・ワイルドの生涯」となっている。「オスカア・ワイルド論」(1911 年 3 月)、「ワイルド傳中の一つの謎」(1915 年 12 月)、「オスカア・ワイルドの生涯」(1920 年 3 月) への変遷は、本間のワイルド研究の関心の方向を指し示すものである。本間の関心は獄中前、獄中生活、獄中後のワイルドのうち、獄中生活と獄中後へ向けられており、獄中でのワイルドについては一貫して

> I now see that sorrow, being the supreme emotion of which man is capable, at once the type and test of all great Art. ... Sorrow is the ultimate type both in Life and Art. (4)

と、ひとつの変化としてとらえ、引用し続けている。本間はワイ

ルドの死後に出版されたワイルド伝からさらに獄中生活や獄中後の生活に関心を寄せた。本間のこの姿勢は、昭和９年(1934)５月の『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)にも現れている。「第７章　唯美主義の衰退」は「第１節　ワイルドの下獄誌」、「第２節『ディ・プロファディス』」となっており、その文中においても「悲哀はワイルドにとって新しい生活の基礎であった」[5]としている。本間のワイルド研究は『英国近世唯美主義の研究』で大きくまとめられた。大正７年(1917)５月の『近代名著評釈』(春陽堂)では「第２章　近代文学と世紀末傾向」、「第９章　オスカア・ワイルド――『ドリアン、グレイの絵姿』」を取り上げた。本間はデカダンの特徴をマックス・ノルダウ(Max Nordau, 1849-1923)の見解に従って５つの特徴を示した。デカダン思想の第１の特徴は反科学的傾向である。言い換えれば、神秘主義である。第２の特徴は「自己崇拝」的傾向、第３は技巧的なものを偏愛する傾向で、ワイルドを極端に達した者として扱い、第４は道徳・宗教・習慣など、社会制度に対して無感覚であり、自己の芸術のみ執着するという意味の無感覚であり、別な言葉で言えば、芸術至上主義である。第５は人生の醜悪な一面を偏愛する傾向、すなわち悪を偏重する傾向である。いわゆる悪魔主義のことである。

エピローグ

本間久雄は大正時代に多くの研究を発表するとともに、翻訳も発表してきた。本間の研究は多岐に渡るが、これまで取り上げてきたもの以外にも、大正６年(1917)11月の『新文学概論』(新潮社)、大正９年(1920)６月の『生活の芸術化』(三徳社)、大正14年(1925)５月の『近代芸術論序説』(文省社)などでもワイルドについて言及しているものがあり、『早稲田文学』をはじめとした定期刊行物にもワイルドに関する論文や翻訳を発表している。

大正時代のワイルド研究はワイルド伝などを通して獄中でのワ

イルドに強い関心が向けられた時代である。

注

(1) 佐々木隆「本間久雄のワイルド研究——明治時代」(『異文化の諸相』第 26 号、日本英語文化学会、2005 年 12 月)。

(2) Ibid., pp.56-59.

(3) 本間久雄『近代名著評釈』(春陽堂、1918 年 5 月)、p.160-161.

(4) *The Complete Works of Oscar Wilde*, (Collins, 1990), pp.919-920.

(5) 本間久雄『英国近世唯美主義の研究』(東京堂, 1934 年 11 月), p.403.

キーワード：本間久雄、ワイルド、唯美主義

＊本間のワイルド関連の大正時代の年譜

大正元年(1912) 9 月　『新潮』(第 17 巻第 3 号) に翻訳「意外」を発表。

大正 2 年(1913) 2 月　『高台より』(春陽堂) を出版。「オスカア・ワイルド論」を収録。

大正 2 年(1913) 3 月　『文章世界』(第 8 巻第 3 号) に「谷崎潤一郎論」を発表。

大正 2 年(1913) 4 月　翻訳『遊蕩児』(新潮社) を出版。『ドリアン・グレイの肖像』の翻訳。

大正 2 年(1913) 5 月　『新潮』(第 18 巻第 5 号) に「『遊蕩児』に於て作者は何を描かんとしたか」を発表。

大正 2 年(1913) 7 月　文芸協会解散。島村抱月、芸術座を結成。早稲田大学教授を辞す。

大正 2 年(1913)10 月　『早稲田文学』(第 95 号) に「ワイルドとダヌンチオ」を発表。

大正 2 年(1913)12 月　『近代』(創刊号) に「『サロメ』と『秋夕夢』」を発

表。

大正３年(1914)１月　『演芸画報』(第８年第１号) に「『先代萩』と『サロメ』」を発表。

大正３年(1914)９月　『雄弁』(第５巻第９号) に「ワイルド雑記」を発表。

大正３年(1914)11月　『早稲田文学』(第108号) に「オスカア・ワイルドに関する一新書」を発表。

大正４年(1915)１月　『早稲田文学』(第110号) に翻訳「ペン、鉛筆及び毒薬」を発表。

大正４年(1915)５月　『新潮』(第２２巻第５号) に翻訳「審判の家」を発表。

大正４年(1915)６月　『早稲田文学』(第115号) に「二つの『サロメ』劇」を発表。

大正４年(1915)９月　『早稲田文学』(第118号) に「獄中のワイルド」を発表。

大正４年(1915)10月　『大正文学』(第２巻第９号) に「獄中のワイルド」を発表。

大正４年(1915)12月　『早稲田文学』(第121号) に「ワイルド傳中の一つの謎」を発表。

大正５年(1916)５月　『早稲田文学』(第 126 号) に翻訳「『フローレンスの悲劇』」を発表。

大正５年(1916)10月　『早稲田文学』(第131号) に翻訳「星の子供」を発表。

大正５年(1916)12月　翻訳『柘榴の家』(春陽堂) を出版。

大正６年(1917)６月　『近代文学之研究』(北文館) を出版。

大正６年(1917)７月　『早稲田文学』(第140号) にブレモン伯爵夫人「オスカア・ワイルド追憶記」を翻訳。

大正７年(1918)　早稲田大学講師となる。『早稲田文学』編集主幹となる。(～昭和２年12月まで)

大正７年(1918)４月　文芸会主催講演「オスカア・ワイルド下獄事状」(於：

早稲田大学恩賜館）

大正７年(1918)５月　『近代名著評釈』（春陽堂）を出版。

大正９年(1920)３月　『文章倶楽部』（第５巻第３号）に「オスカア・ワイルド近代文豪傳」を発表。

大正９年(1920)３月　矢口達監修『ワイルド全集』（全５巻，天佑社）の第１巻に「ワイルドの生涯」を発表。

大正９年(1920)４月　矢口達監修『ワイルド全集』（全５巻，天佑社）の 第２巻に翻訳「フロレンスの悲劇」を発表。

大正９年(1934)４月　『早稲田文学』（第 173 号）に翻訳「個人主義と社会主義」を発表。

大正９年(1920)７月　矢口達監修『ワイルド全集』（全５巻，天佑社）の 第５巻に翻訳「ペン、鉛筆及毒薬」と翻訳「社会主義と人間の霊魂」を発表。

大正９年(1920)７月　翻訳『社会主義と人間の霊魂』（新潮社）を出版。

大正 10 年(1921)４月　『文章倶楽部』（第６巻第４号）に「ワイルド評傳」を発表。

大正 12 年(1923)10 月　『唯美主義者　オスカア・ワイルド』（春秋社）を出版。

大正 14 年(1925)１月　『早稲田文学』（第 227 号）に「近世英文学上の快楽主義」を発表。

大正 14 年(1925)２月　『早稲田文学』（第 228 号）に「近世英文学上の頽廃派の運動」を
発表。

大正 15 年(1926)６月　『文芸思想研究』（第３巻）に「近世英文学上の唯美運動（一）」を発表。